



『がんばる避難所』登録

松源寺通信第五号に掲載した地域防災について、古山健一青葉土樋町内会長と町内会役員の方々と協議した。その結果、松源寺本堂・庫裡・境内地を『がんばる避難所』として登録し、災害の際の一次避難所として使用する事といた

永松だより

松源寺通信 第6号

松源寺開創 500年
平成33年・2021年
みなさまのお知恵とお力を合わせていただき
この佳きめぐりあわせを寿ぎましょ

しました。
早速、七月一日開催の防災訓練の場所として境内地（第二駐車場）を提供し、実施に向けて準備を進めることが決まりました。

青葉土樋防災訓練

仙台空襲から七〇年を迎える七月一日（金）。晴天の中、昼過ぎから青葉土樋町内会の役員の方々と永松会・婦人会役員が集まり、会場の設営や機材の搬入などの準備を進めました。

午後四時開会、古山会長の挨拶に続きお集まりの方々に挨拶を申し上げました。お忙しい中駆けつけて頂いた五橋中学校の教頭先生からもお言葉を頂き、訓練がスタートしました。

朱塗りの消防車と共にご協力を頂いた五名の消防隊員の指導のもと、



と、火災の際の消火訓練が行われました。火に見立てた的を目標けて消火器のノズルを向け、地域の老若男女が次々と

消火していきまし
た。安全ピンを抜き、ホースを手に取り、消火レバーを引く。簡単そうに見えますが、イザという時に慌てないようにする訓練でした。

次に車イスを扱う練習です。乗る側と乗せる側に分



かれて、段差を越える練習。なかなか難しいがコツをつかむと慣れてきます。実際に操作してみないと乗せるコツがつかめないようです。また、発電機の使い方や照明器具の使い方も練習しました。説明書を片手にあてもないこうでもない・・・
最後は炊き出しのアルファ米と今回はお寺で準備した出店で焼きとりや焼きそばをテントの中で頂きました。強い西日の中、気温も下がらず湯気の上がつた豚汁をすすりながら、また額に汗がにじんできます。
スタッフも含めて約五〇名とベツトが二名。盛会に訓練を終りました。

団体参拝◇研修旅行

平成二十七年六月二三日～二五日

午前八時にJR仙台駅に集合した。今回は仕事の都合などで参加が叶わない方のお見送りを受け、仙台を後にした。大宮駅で北陸新幹線はくたかに乗車、能登半島へ向かった。新高岡駅からバスでの移動、永光寺に到着すると整備された参道にきれいに咲いた花が迎えてくれた。本堂でご本尊さまに読経し屋敷ご住職より伽藍をご案内頂いた。峨山禅師の木像にも手を合わせ、五老峰と峨山道の入口までお参りした。

峨山禅師六五〇回大遠忌の本年



洞谷山永光寺（とうこくさんようこうじ）は、鎌倉時代末の正和元年（1312年）曹洞宗太祖常済大師瑩山紹瑾大和尚四十五歳の時、中河（羽中市）の地頭、酒匂頼親の娘（黙譜祖忍）の開基により創建された開山禅師示寂の道場です。瑩山禅師は当山を拠点とし加賀・能登の各地を歩かれ在地の民衆と深くまじわり、又 能登の地で多くの門弟を育てられ元亨3年（1323年）春には五老峯を築造し曹洞宗教団の基礎をつくられまし



ご生誕の日にお参りできたことは感慨深い事だ。
二日目は大本山總持寺祖院を参拝し、能登の観光を満喫した。最終日は金沢で加賀藩の文化に触れ充実した研修となった。

◆ 禅の小窓 6 ◆ 廓然無聖 ◆

た。創建当時は、伽藍が薨を並べ繁栄し、南朝、北朝の帰依により勅願寺に列せられ隆盛をきわめました。その後、二度の大乱に（応仁二年、天正七年）遭い全山焼失、幸い印派仏師の作になるご本尊様等は難をまぬがれ多くの文化財を所蔵しています。又、現在の伽藍は寛永以後の再興で永光寺様式として禅宗伽藍の一典型を保っています。

文芸の風

読者の皆様からの投稿作品を紹介します

短歌

佐々原洋子（泉区向陽台）

一、友の言う そろそろ上を向いてよと
そつと上向きや まだ薄ぐもり
一、肩の凝りならず心の凝りもあり
やけに青空 澄みわたりたり

『原発難民日記』 秋山豊寛 著（岩波書店） 定価：本体560円＋税

さようなら、阿武隈の美しい森よ一。記者、宇宙飛行士として活躍後、福島県内で有機農業を営んできた著者は、原発事故がおきて以来「難民」

となった。本書は、郡山郊外のホテルへの一時避難、群馬県の友人農家宅への疎開、モスクワでの健康チェックなど漂流の日々を、怒りの炎に支えられて綴った日記である。「農のある暮らし」から見た原発危機の記録と考察は、私たちが自ら考え、行動を起こす上で多くのヒントを与えてくれる。



ます。本堂にある襖書は幕末三舟の一人である山岡鉄舟居士が明治十八年に寄贈したもので、数ある居士の書の中でも最高傑作として有名です。このように永光寺は幾多の盛衰を繰り返しながらも、多くの方々に支えられ、瑩山紹瑾禅師以来およそ七百年の法燈、そして、歴史的な文化財を守り続けています。



達磨忌 (だるま忌) 10月5日

「七転び八起き」のことわざや「ダルマさん」の愛称で知られている達磨大師は、初めてインドから中国に禅の教えを伝えられた方で、「震旦（中国のこと）初祖」または「円覚大師」ともお呼びし、中国北魏・梁代頃に、インドから来た渡来僧と伝えられ、お釈迦様から数えて二八代目のお祖師さまです。中国禅宗の初祖とされるお方で、宗門寺院では本堂に向かつて左の段にまつられています。赤い縁起達磨（ダルマさん）は、達磨大師が寒さよけに頭から「被」

と呼ばれた掛け布団をかぶって坐禅している姿がもとになっているとされます。特に、群馬県の高崎市がその産地として有名ですが、寺院のみならずお宮でも、縁起物として売られます。これは、ダルマさんが何度転んでも起き上がるので、縁起が良いとされたのです。「碧眼の胡僧（青い目の異国の僧）」とも表現されますが、伝記に関しては諸説ございます。禅宗の伝統的な見解では、梁の普通八年（五二七年）に南海より広州（広東省）に上陸し、梁の都、建康（南京）に来て、武帝（蕭衍）と問答を交わし、帝との機縁がかなわず北に渡り、崇山少林寺に入って、面壁九年（九年間、壁に面して坐禅すること）されたことから、「壁観婆羅門」と称されました。なお、梁の武帝と達磨大師との間で交わされたと言われる問答は以下の様に伝えられています。如何なるか是れ聖諦第一義。（仏法の根本義は何でしようか？）磨云く、廓然無聖。（カラリとして、聖なるものなど何もない。）



帝云く、朕に対する者は誰ぞ。（一体、私の前にいるあなたは誰なのでしようか？）磨云く、不識。（そんな事は知らない。）このほか、武帝が即位して以来、寺を造立したり写経したり、僧を得度させること、記録としてこれ以上の者がいないほどであったが、一体どれほど多くの功德があるだろうか？とたずねた武帝に対し、「無功德（功德など無い）」と答えたともされます。この問答は、「達磨廓然の話」として有名ですが、経論の文字にとらわれず自己の本来の面目に徹することを目指す、達磨大師の禅思想をよく示しております。そして、達磨大師は十月五日に、論敵の毒殺によって亡くなられたと言われています。達磨忌は、達磨大師の命日にあたり報恩の法要

を営み、ご遺徳をしのぶ日です。つまり、達磨大師さまが、第二七祖の般若多羅尊者より正法を受け継がれ、強い誓願をもって、中国に來られたことを讃歎しつつ、我々も達磨大師の示された正しい教えを益々広めることを誓う意味で、曹洞宗のお寺では、この達磨大師のご命日をお迎えして、報恩の法要を営むのです。

松源寺婦人会会員募集

会長 木皿 津江子

松源寺では婦人会を組織し毎年四月に総会ならびに研修会を開催しております。

また、有名なお寺巡りや観光を目的とした移動研修会（団体参拝）にも参加しております。秋には研修をかねて観音堂の御開帳供養と秋の夕べコンサートを行います。

婦人会役員の方には六地藏尊の装飾の修繕や恒例の祠堂法要では参列者に提供している「豚汁」を調理して頂いております。楽しく賑やかな婦人会の仲間に加わって頂きたいと思っております。

- 記
- 一、年会費 三千元
 - 一、対象 松源寺檀信徒

以上

祠堂法要のご案内

平成二十七年十一月五日（木）
午前十時三〇分 打出
祠堂法要
お話し
会食（庫裡二階）



当山に位牌が祀られている白河家の主君結城義親公は寛永三年（一六二六）二月二六日に八六歳でその数奇な一生を閉じている。遺骸は茶毘に付され、高野山清浄心院に葬られている。この様に古来お墓と位牌と仏壇といったお祀りの仕方は、その遺徳を偲び別々の場所に祀られていた。

曹洞宗では大本山永平寺や大本山總持寺などに特別に故人の位牌を祀り、修行僧の回向を受ける祠堂位牌の供養を行っている。同じ意味で仏壇やお墓でのお祀りだけでなく、松源寺本堂内の位牌堂に特別にお祀りするのが祠堂位牌である。この祠堂位牌の供養を行うのが「祠堂法要」という事になる。当山では毎年十一月の第一友引の日に、近隣の御寺院様を集め法要を執り行っております。会食では婦人会役員のお手伝いで豚汁を振る舞っております。是非ご参加ください。

仏具紹介 『木魚』もくぎよ

木製で、楕（バイ）でたたいて音を鳴らす鳴物（ならしもの）の一種。読経の際にたたいて音を鳴らし、その音のリズム（速度）にあわせてお経を読む。読経の全体の流れを生み出し、いわばパーカッション的な存在。魚の形をした魚鼓（ほう）がその原型であったといわれるが、改良されて、より使いやすい現在の形になったと思われる。

音が響くように中が空洞になっており、例えるならば鈴のような形である。大き



東側

西側

表面には、鱗の彫刻がされており、一般的に龍頭魚身で口には玉をくわえたデザインのものが多い。「魚が化して龍となる」登竜門の故事によるものであるとの説がある。「お寺の木魚がドクロに見えて怖かった」と話す人がいたが、たしかにそう見えないこともない。上下を逆さにすると龍がモチーフであることが良くわかる。